お母さんはクリエーター

髙野敦志

目次

お母さんはクリエーター　2
あとがき　9

お母さんはクリエーター

髙野敦志

九十一歳のお母さんが、結婚しない息子と娘、野良だった猫の兄弟と暮らしている。十年前から認知症を患っているから、時計が８時だと八月だと思ってしまう。長い針と短い針も区別できないから、長い針が３を指していれば、三時だと思ってしまう。昼ご飯を食べたばかりなのに、「おやつはなあに」と聞く。

「何かおいしいものはないかしら」
お母さんが一番好きな食べ物はイチゴだ。ご飯だと口に入れてあげなければ食べないのに、イチゴだとつまんでどんどん食べる。自分の分を食べてしまうと、娘のイチゴに手を出し、まだ食べていない息子のイチゴをかき寄せて、「私のイチゴ食べちゃだめ」と言う。
数年前のこと、お母さんは足の骨を折ってしまった。認知症でリハビリできないから、手術は無理だと言われた。車椅子の生活が始まったのだが、骨は自然にくっついてしまった。立ち上がれないと寝たきりになるから、息子と娘はうちでリハビリすることにした。
お母さんを車椅子から立たせると、娘が腕を支え、息子が腰を支えて、さあ出発だ！
「ああ、痛え」とお母さんが叫ぶ。息子がすかさず、「会いてえ、

会いてえ、誰に会いてえ」と言うと、お母さんは「猫ちゃんに会いたい」と答える。心配した猫たちが寄ってきて、並んだ三人を見上げる。ぼくが「汽車汽車シュッポシュッポ」と歌い出すと、三両編成のリハビリ列車が、終点のトイレ駅に向かって進んでいく。介護ってものは、楽しんでやらなければやってられない。
いくら話がトンチンカンになっても、感情ははっきり残っている。あるとき、テレビをかけていたら、東日本大震災の津波が映し出された。黒い波が岸壁を越えて道路にあふれ、車と家を押し流していく。その惨状を見ていると、お母さんの顔が引きつっていった。
「地球がなくなってしまう！」と叫ぶと、救いを求めるように、息子の顔を見た。

「地球はいくつあるの？」
「えっ？」
「地球がなくなってしまったら、今度生まれてくるとき、困ってしまうから」
　認知症になったといっても、人間として大切なことは、分かってるんだな。今の日本を動かしてる政治家は、老い先短いのをいいことに、自分さえ逃げ切れれば、あとはどうなろうと知ったことじゃない、とでも思っているんだろう。でも、人間も動物も、生まれては死んで、死んでは生まれていく。未来について考えるのは、これから生まれてくる自分のためでもあるのに。

　認知症が進んだ今は、もう息子が誰だか分からない。「ぼくは

誰？」と聞くと「富士山」という答えが返ってきた。「太ってるから富士山なんでしょ」と妹が憎まれ口をきく。「お母さんの名前は？」と聞くと、「お母さんじゃない」と言い返す。「こんな大きなの、お腹の中から出てくるはずないじゃない」
　それでも、母親だという意識はどこかに残っているのか、カラスがカーカー鳴いているので、息子がふざけて、「おっかあ、おっかあ」と言うと、からかわれたと思ったのか、膨れて息子を叩こうとする。
「私は早稲田大学の先生なんだから！」
　実は、お母さんは学校の先生になりたかったらしい。終戦後に闇市でメチル入りの酒を飲まされて、父親が死んでしまったので、夢の中でしか先生になれないんだろう。指揮者みたいに腕を振ると「早

稲田、早稲田」と校歌を歌い出す。息子の入学式にも卒業式にも行かなかったから、早稲田大学がどこにあるのかも知らないのに。

ここ数年、お母さんは猫の番組ばかり見ている。猫は言葉をしゃべらないので、内容がこんがらかることもないからだ。同じビデオを見せても、すぐに忘れてしまうから、何回見ても面白いらしい。

「かわいい猫ちゃんね！」

画面に猫が映ると、うちのお兄さん猫も、一緒に猫の番組を見る。弟の猫はテレビの前に立って、番組を見せようとしない。テレビじゃなくてぼくの方を見て、とでも言っているのか。「テレビを見る猫」と「テレビを見せない猫」がお母さんのかわいい孫なのだ。

お母さんはいつまで元気でいられるんだろう。遠い世界に旅立つ

前に、一度正気に戻ってくれたら、お母さんが夢の世界で生きるようになってから、どんなことがあったのか、これからどうやって生きていくのか話すのに。昔みたいに、おしゃべりしながら食事したり、お母さんが話してくれて忘れてしまったことを、みんな教えてあげるのに。でも、足が不自由になり、一日中おむつをしていることなんか、知らない方がいいのかな。

あとがき

認知症を患った老母と、結婚しない兄と妹、家に住み着いた猫の兄弟。童話「茶トラのシマちゃん」のモデルとなった一家の介護の日々を、ユーモラスなエッセイで表現してみました。

二〇二二年六月二十三日

高野敦志